

第 375 回 大阪大学臨床栄養研究会 (CNC)

日時：平成 29 年 3 月 13 日 (月) 18 : 00～

場所：大阪大学医学部 講義棟 2 階 B 講堂

「栄養と腸内フローラが織りなす

腸管免疫環境の構築と健康科学への展開」

国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所 國澤 純先生

近年、アレルギーや生活習慣病との関連も含め、健康維持・増進を担う最重要キーワードとして「腸内環境」が注目されている。食事は栄養素だけではなく、様々な含有成分や代謝物を供給することで生体応答の制御に関わる。さらには数百、数千種類とも言われる腸内細菌も栄養素の供給や食事の代謝に関わる。一方、宿主側の観点で眺めてみると、腸管は消化組織としてだけではなく、最も多くの免疫担当細胞を有する体内最大の免疫臓器である。腸管免疫は免疫本来の機能である異物を認識し排除するだけではなく、有益な異物に対しては積極的に無視や寛容を誘導することで、食事の取り込みや腸内細菌の共存を可能にしている。最近の研究から、腸管の免疫は生体内の免疫、さらには免疫以外の生体応答にも関わることが示されてきている。すなわち腸内環境を介した生体応答を考える際には、腸管免疫と腸内細菌、食事の三者間相互作用が一つの鍵になると言える。

これまでも腸内環境の重要性は広く認識されていたものの、それらを構成する因子が複雑多岐に渡るため、その実体については長い間不明であった。しかしながら近年、次世代シーケンサーを用いた腸内細菌叢の遺伝子レベルでの解析やメタボローム解析による代謝物の測定が可能になってきたこと、さらには免疫学的観点からの腸管免疫のユニーク性が解き明かされてきたこともあり、腸内環境の詳細が明らかになりつつある。本講演では脂質やビタミンといった食事や腸内細菌を介した免疫制御に関する基礎研究の成果とその知見を応用した機能性食品やワクチン開発、創薬などへの応用的展開、さらには医薬健栄研において取り組んでいる健常人を対象としたコホート研究を活用した健康科学に関する研究について、最新の知見も含め紹介したい。

世話人：生体情報科学 木原 進士

E-mail : skihara@sahs.med.osaka-u.ac.jp

次回、376 回 CNC は、森 正樹先生のお世話で平成 29 年 4 月 10 日 (月) 開催予定です。